

ブリヤ＝サヴァラン『味覚の生理学』における「アントロポノミー」
—休息・睡眠・夢をめぐる—

浦上 祐子*

Réflexion sur « l'anthroponomie » dans *Physiologie du goût* de
Brillat-Savarin autour des phénomènes du repos, du sommeil et du rêve

URAKAMI Yuko

Résumé

En pleine révolution de la médecine, Brillat-Savarin a vulgarisé la philosophie médicale développée par les Idéologues dans le sillage de Cabanis, qui met l'accent sur les impressions internes reçues dans les organes internes, tels que le cerveau, le poumon, le foie, l'estomac, etc. C'est dans cette perspective que l'auteur de *Physiologie du goût* s'intéresse aux phénomènes du repos, du sommeil, et du rêve et particulièrement à l'influence de la digestion sur ces derniers. Une autre influence encore plus sensible pour Brillat-Savarin est celle de Maine de Biran, surtout de sa conception du moral de l'homme : la jonction du physiologique et du psychologique qui préfigure l'inconscient freudien.

L'originalité de Brillat-Savarin consiste à lier cette « science de l'homme » à la gastronomie qui subsume non seulement toutes les autres sciences, mais tous les produits de la civilisation. C'est ce qu'il désigne par le néologisme « anthroponomie ». Selon Brillat-Savarin, l'art de la bonne chère est essentiel pour avoir une vie productive en influant sur la qualité du sommeil et fait naître des rêves agréables qui stimulent la créativité.

Keywords : Brillat-Savarin, *Physiologie du goût*, Anthroponomie, Cabanis, Maine de Biran,

1. はじめに

通常美食の文脈で論じられることの多いブリヤ＝サヴァラン (Jean-Anthelme Brillat-Savarin, 1755-1826) の主著『味覚の生理学』(*Physiologie du goût*, 1825)¹には、美食の書物としては唐突に感じられる休息、睡眠、夢をめぐる言説が挿入されている。瞑想19「夢について」における「夢の現象」の項には、次のような一文がある。

ときに睡眠と夢には何か普通でない現象が伴うことがある。そういう現象の検討は、アントロポノミー (anthroponomie) の進歩に役立つだろう。²

「アントロポノミー」はブリヤ＝サヴァランの造語である³。ギリシャ語に由来する<anthro-> (人間、人類) と<-nomie> (学、法則) という2つの要素で構成されていることから「人間学、人類学」というような概念であることが推察される。では、睡眠に付随する現象の検討が「アントロポノミー」の進歩に役立つとは、どのような意味であろうか。

本論では、『味覚の生理学』の睡眠や夢に関する言説に、当時の医学が与えた影響を明らかにしながら、ブリ

キーワード：ブリヤ＝サヴァラン、『味覚の生理学』、アントロポノミー、カバニス、メヌ・ド・ビラン

*平成23年度生 比較社会文化学専攻

ヤ＝サヴァランにおける「アントロポノミー」と美食の関係性を考察したい。

2. アントロポノミー

はじめに「アントロポノミー」という語に検討を与えたい。当時フランスには<anthropologie>（人類学）という語が存在していたが、ブリヤ＝サヴァランはなぜこの語を用いなかったのであろうか。ロベールの『フランス語歴史辞典』によると<anthropologie>は当時「今日ではむしろ身体的人類学あるいは生物学的人類学と呼ぶもの」という概念を指していた。ドイツで「人間の生物学的特徴を研究する」という概念で用いられていた語が19世紀初頭フランスに渡ったのである。⁴

ここで想起すべきは、ブリヤ＝サヴァランへの影響が指摘されているカバニス（Pierre Jean Georges Cabanis, 1757-1808）の存在である。⁵ 彼は、主著『人間の身体と精神の関係』（*Rapports du physique et du moral de l'homme*, 1802）の中で、人間の精神現象を身体組織との関係で捉える自らの人間学（science de l'homme）に「ドイツ人がanthropologieと呼ぶもの」⁶という註をつけている。カバニスの人間学は、メヌ・ド・ビラン（Marie François Pierre Maine de Biran, 1766-1824）が「生理学的学説の濫用」⁷と危惧するほどラディカルに精神の根源を身体に求めるものであった。

カバニスの影響を受けつつも、ブリヤ＝サヴァランにとって人間の精神は、もっと豊かで奥深いものであったに違いない。彼は『味覚の生理学』の中で、食べることをめぐって生じる人間の精神と身体との関係を生理学的に捉えつつも、人間の精神を完全に身体に還元することはない。新語発明者を自称する⁸ブリヤ＝サヴァランは、独自の人間学を表現するために「アントロポノミー」という語を造ったと考えられる。それはおそらく、人間の身体と精神が、『味覚の生理学』の主題であるガストロノミーで溶けあうような人間学であろう。ガストロノミーという語自体、ギリシャ語の<gastronomia>（胃の調整をする術）に由来し、胃の学問という身体的概念を包含すると同時に、転じて美食を楽しむ術という精神的概念も持つ。以上を念頭に、「アントロポノミー」という概念の検討を進めてみたい。

3. 医学哲学

はじめに注目したいのは、『味覚の生理学』の序文の前に付された「伝記」⁹である。ブリヤ＝サヴァランの故郷ペレが輩出した医師たちの功績を讃えたものだが、美食の言説であるはずの作品に美食家ではなく医師の伝記が付されているのはなぜだろうか。

ここで想起すべきは、フランス革命後のパリで生じた医学革命である。『味覚の生理学』は1825年に出版されたが、医学史家のアッカークネヒトは、1794年から1848年までの55年間をフランスにおける病院医学の時代と呼び、パリで医学が優れた発展を遂げた特殊な期間と位置づけている。¹⁰ とりわけ18世紀最後の10年間と19世紀最初の10年間は、病院において重要な改革が実施された時期であった。古い病院は改善され、小さく新しい病院が建設された。革命以前は惨めな人々が集まる場所であった病院は、孤児院、養老院、刑務所と分離のうえ国有化され、管理は中央集権化され、学校も設立された。医学は新たな場を得て急速に発展、この時期のパリは世界の医学の中心地となったのである。¹¹

ブリヤ＝サヴァランは実生活で医学の進展に指導的立場として関わった医師たちと深い交流関係を結んでいた。なかでもオートウイユのサロンにおける医師カバニスを中心とするイデオログたちとの交流は、彼の思想に決定的な影響を与えたと思われる。¹² 彼らの主たる関心の一つは、人間の精神の形成過程の法則の追求であった。イデオロギー（Idéologie）と称するその学問は、その名称の考案者デスチュット・ド・トラシ（Antoine-Louis-Claude, comte Destutt de Tracy, 1754-1836）が言うように、動物学の一部として、ビュフォン（Georges-Louis Leclerc, comte de Buffon, 1707-1788）が深めるに至らなかった人間の精神、特に知的諸能力という重要な部分を補完する意図において企画されたものであった。¹³ 生理学的側面の探求を託された医師カバニスは、「哲学は医学の中へ、医学は哲学の中へ」¹⁴というヒポクラテスの言葉を胸に刻みながら、人間の精神を身体組織、特に脳と神経の関係において捉えることとなる。

注目すべきは、カバニスを中心とするイデオログの医師仲間¹⁵そして医師ではないが一時期カバニスの弟子であったビランが皆、睡眠や夢に関心を寄せていることである。ブリヤ＝サヴァランが『味覚の生理学』の中で、自らを「アマチュア医師」¹⁶と呼び、カバニスの愛弟子リシュラン（Anthelme-Balthasar Richerand, 1779-1840）と共に、ルカなる人物による睡眠時の精神の状態に関する論考の喪失を悔やみ¹⁷、自らも睡眠、特に夢について多くの頁を割いて語っているのは、もはや偶然ではあるまい。このような知的環境に身をおいたブリヤ＝サヴァランは、医師のまなざしを持ってこの作品を執筆し、カバニスの流れをくむ医学哲学を基盤とする人間学を、ガストロノミーに組み込んだものと考えられる。

4. カバニスの影響

まず、ガストロノミーの身体的側面である胃が、カバニスの流れをくむ医学哲学とどのように関係しているのか見てみたい。

カバニスにとって人間の精神は外的印象、つまり視覚、嗅覚、味覚などの五感の働きが及ぼす影響だけでなく内的印象、つまり心臓、肺、胃などの内的器官の働きが神経を通じて脳に及ぼす影響をも考慮すべきものであった。特に胃は、すべての神経系と脳に大きな影響を及ぼすため、胃が衰弱すると、「あらゆる注意は疲れ、考えはうまくまとまらず、大抵の場合、中途半端のままになる。意志は曖昧で力がなく、感情は暗く憂鬱になる」¹⁸等の精神の変容が生じるとされる。こうしたカバニスの思想がブリヤ＝サヴァランに与えた影響は、『味覚の生理学』の瞑想¹⁶「消化について」の項に記された次の一文に見てとれる。

消化はあらゆる身体的作用の中で、最も個人の精神状態に影響を及ぼすものである。¹⁹

この思想の原理をブリヤ＝サヴァランは次のように説明している。人間の精神は、外界の事物と自らを結ぶ諸器官を通して印象を受ける。従って身体器官、とりわけ胃に何らかの問題が生じると、必然的に精神に影響が及び、最終的には知性の変容する。ゆえに文学における喜劇と悲劇の違いは単に詩人の消化の度合いの相違にすぎない。国の運命も指導者の胃の調子によるし、ある元帥が食後の1時間に見境なく人を殺すのも消化に原因がある。「我々は知らないうちにそうになっており、殊にそうなるまいと思ってもそうならざるをえない」。²⁰ つまり、そうした精神の変容は、無意識かつ不可抗力の現象なのである。

このように、ガストロノミーの身体的側面である胃は、消化という概念でカバニスの医学哲学における内的印象と結びつき、ブリヤ＝サヴァランの人間学、つまり「アントロポノミー」を形成しているといえる。

5. メーヌ・ド・ビランの影響

では、ガストロノミーの精神的側面である美食を楽しむ術は、「アントロポノミー」とどのように関係しているのだろうか。

ここで我々の関心を引くのは、ブリヤ＝サヴァランへの影響が指摘されているカバニスよりも、むしろ、一時期カバニスの弟子でありながら後にカバニスの思想から離れていったメーヌ・ド・ビランの『人間の身体と精神の関係（コペンハーゲン論考、1811年）』（*Rapports du physique et du moral de l'homme*, - Mémoire de Copenhague, 1811）である。（以下「コペンハーゲン論考」と記す。）ビランは執筆したものをほとんど出版しなかったが、19世紀を通じて思想界に大きな影響力を持っていたとされる。トニー・ジェームスによると、例えば19世紀初頭パリの大学で精神医学の長を務めた医師ロワイエ・コラル（Antoine-Athanase Royer-Collard, 1798-1825）は、ビランを「我々すべての師」と呼び、フロイトとほぼ同時に無意識の概念を発見したとされる20世紀前半の偉大な精神医学者・心理学者ピエール・ジャネ（Pierre Janet, 1859-1947）は、ビランを自らの重要な先駆者と位置付けている。²¹ 「コペンハーゲン論考」も当時未刊であったが、カバニスを中心とするイデオログたちのサロンに出入りしていたブリヤ＝サヴァランは、彼らとの緊密な交流を通じて読んだ可能性が高い。

『味覚の生理学』、特に「アントロポノミー」に関する記述には、人間の精神への理解に心理学と生理学がいか

に相互に貢献しうるかという問題を論じた「コペンハーゲン論考」と極めて類似した思想が記されている。以下にその詳細を検討する。

「コペンハーゲン論考」の中でピランは、睡眠状態に付随する現象、つまり夢想あるいは夢の観察は、次の2点において有益であると語っている。

1. 形而上学者やモラリストは、夢を生み出す力が自然発生的に働くことによりもたらされる(…)思惟の本性のずれや歪みを通して、思惟の本性のいくつかの内的な秘密を暴きだすことさえ可能である。²²
2. 生理学者は、特定の内部器官の偶然の病変と夢想の性質との間の(…)特殊な関連性を明らかにすることができる。²³

つまりピランによると、夢の観察は、1.隠された心の内奥を暴きうる 2. 夢の性質と内的器官の状態には関連性があるという点で、人間の精神の心理学的、生理学的両事象の解明に有益だというのである。このピランの思想と、夢の観察は「アントロポノミー」の進歩に有益だとするブリヤ＝サヴァランの思想は、呼応しているように思われる。

以下、上記のピランの思想の1と2がそれぞれどのようにブリヤ＝サヴァランの「アントロポノミー」と呼応しているかを考察する。

まず、1. の夢の観察は隠された心の内奥を暴きうるという考え方は、『味覚の生理学』では夢遊病者の逸話の中に読み取れる。ブリヤ＝サヴァランは、夢遊状態で神父を殺害しようとした修道僧の行為に対し、夢見る状態で行われたため「無意志的」²⁴ (involontaire) であると繰り返し述べている。この「無意志的」という語は、ブリヤ＝サヴァランにおいては本心の暴露と結びついていると考えられる。というのも、彼は睡眠に関する記述の中で、かろうじて意志がありながらもそれが薄れゆく眠り始めの瞬間に「少なからぬ夫が遺憾なる証拠を掴んだ」²⁵、つまり、言い違いなどのいわゆる錯誤行為は、往々にして半醒状態に生じると指摘している。この記述からも、ブリヤ＝サヴァランにおいては、睡眠に向かって意志が薄れていくほど人間の本心は表出し易くなると考えられていることがわかる。従って、睡眠によって意志が失われた状態で行われようとした殺人行為は、「憂鬱で暗い性格」²⁶と記述される修行僧の抑圧された本心の表出と読み取ることが可能であり、ブリヤ＝サヴァランがその行為に対して繰り返し用いた「無意志的」という語は、現代の心理学でいわれている無意識に近い概念と理解できよう。

このように、ブリヤ＝サヴァランにとって夢の観察は、無意識に近い概念と結びつくことによって、人間の精神の探求に、測り知れない深みを与えてくれるのである。それはピランの言う通り、人間の心理学的側面の解明に役立つのであり、ブリヤ＝サヴァランの人間学、つまり「アントロポノミー」の進歩に有益なのである。

ところで、夢を観察するためには、当然のことながら夢を見なければならぬ。そこで重要となるのが、2. の夢の性質と内的器官の状態には関連性があるという概念である。

「コペンハーゲン論考」の中でピランは、夢の性質と内的器官の関係について繰り返し語っている。だが、それは一体どのような原理によって可能なのだろうか。この点については、ピランの粘膜の理論に注目したい。ピランによると、内的器官は粘膜で形成されているが、その粘膜は「外部因子が直接働きかける、臭いや味を感じる鼻腔の内側や舌の表面の粘膜と同じ性質」²⁷を持つ。ただし、それは「自我によって何も知覚されない」²⁸という点において嗅覚や味覚と異なる。例えば胃の場合、胃の粘膜に直接触れる食べ物などの摂食物によって無意識に印象がもたらされるということになる。実際、ピランは、「適切な食餌療法と医学でいう非自然的なものの使用を正しく組み合わせ、興奮させたり鎮静させたりする特定の物質」²⁹などの摂取によって内的印象に直接影響を及ぼし、それによって感性や気質を、最終的には知性を変容させる生理学的な方法があると記している。

ブリヤ＝サヴァランの『味覚の生理学』の瞑想21「食餌の休息、睡眠、夢に与える影響」には、このピランの記述に即した思想が記されている。まず、食べ物、刺激物、興奮剤などの摂食物が労働、特に精神的労働の最終的な結果に影響を与えることが示される。栄養不良の状態にあっては「想念は生じても力がなく曖昧である。思索は想念の結合を、判断はその分析を拒む」³⁰。それゆえ貧しい食生活を送る作家の作品には、「常なる不幸や妬

みに刺激されている場合を除いて力を感じられない³¹とされ、反対にオートウイユ、ランブイユ邸などでの美食は「ルイ14世の時代の作家に大変良い影響をもたらした³²と述べられる。人間業と思えない大量の仕事をする人間は、刺激や興奮をもたらすワイン、コーヒー、阿片などを用いたとされている。

だが、これらはいくまで覚醒時の人間の精神に食餌が与える影響である。食餌は睡眠時の精神にまで影響を及ぼすがゆえに重要なのである。このことをブリヤ＝サヴァランは以下のように強調している。

人間は休息していようが、睡眠していようが、夢を見ていようが、常に栄養の法則の支配下にあり、ガストロノミーの帝国から一歩もでない。理論も実際もともに食べ物の量及び質が、労働・休息・睡眠及び夢に強く影響をすることを証明している。³³

では、食餌はいかにして睡眠時の精神に影響を与えうるのだろうか。はじめに、ブリヤ＝サヴァランにおける夢の生成に関する生理学的な理解を確認しておきたい。³⁴

外界から遮断された睡眠状態に生じる夢は、「外界の助けなしに精神に生じる一方的な印象³⁵と定義される。従って夢は「思い出あるいは思い出の組み合わせ³⁶であり「感覚の記憶³⁷とされる。夢の奇異性はこれらの観念連合の異常に求められる。では、外界から隔離された睡眠中の精神に印象が生じるのは、いかなるメカニズムによるのだろうか。

ここで鍵となるのが、各感覚器官で感受された印象を脳に運ぶ役割をもつ「神経液³⁸の存在である。「強力で鋭敏な流体³⁹である神経液は、各感覚器官と脳を結ぶ神経管を流れ、その振動と浸透がもたらす刺激によって、想念を生じさせる。この神経液が消耗し、無活動になると人間は「完全なる睡眠⁴⁰に入り、すべての想念は消失する。だが、睡眠中も継続的に働く消化の作用と、それに伴う食べ物の身体への「同化⁴¹の作用によって、神経液は徐々に補填される。すると睡眠者に想念が生じる。これが夢である。ただし、神経液の浸透度は器官全体が働く覚醒時と比べると劣るため、想念の印象の強度も劣る。

以上の理論から、ブリヤ＝サヴァランの夢の生成においては、覚醒時の食事、その際味覚や胃の粘膜で感受される印象、睡眠中も働く消化や同化、またそれによって補填される神経液による脳への刺激、これらが重要な要素とみなされているといえよう。

これらを踏まえながら、「食餌の夢に与える影響」項をみて見たい。注目すべきは、ブリヤ＝サヴァランが夢を見るにはどうしたら良いかということの主眼に据えていることである。睡眠には必ずしも夢が付随するわけではない。空腹では胃の苦悶が人間を「苦しい覚醒に保ち⁴²、過度な食事ではすぐに完全なる睡眠に入るため「夢は見ても覚えていない⁴³。だが、以下のように適切な食材を食べると、静かな睡眠を誘引することができる。

ある食べ物は静かに眠りを誘う。例えば牛乳が主原料の食べ物、レタス類すべて、飼育鶏、スベリヒユ、オレンジの花、レネット種の林檎を就寝直前に食べると良い。⁴⁴

このように食べ物によって良い睡眠を誘引する方法を述べた後、ブリヤ＝サヴァランは夢を見させる食材を具体的に示していく。

観察に基づく経験によると、食餌は夢を規定する。一般的に軽刺激性の食べ物は夢を見させる。黒い肉類、鳩の肉、カモ肉、ジビエ、特にウサギ肉は夢を見させる。アスパラガス、セロリ、トリュフ、特にヴァニラで香りづけした菓子も夢を見させる。⁴⁵

上記のように「食餌は夢を規定する」としてブリヤ＝サヴァランが食べ物と夢の関係を強調するのは、「これらの食べ物が生じさせる夢が概して軽やかで心地よく、我々の生を、それが中断される睡眠時間にまで延長してくれる⁴⁶からである。睡眠は、人間の生命活動継続のために必要な要求である。だが、そのとき人間は「感覚の不活動のために外界の事物から遮断され、ただ機械的な生命を生きる麻痺状態⁴⁷になる。つまり、覚醒時には文明社会に生きる知的な存在である人間は、睡眠時には極めて身体的あるいは動物的な存在になる。「人間は

無限の活動を享受するようになってきていない。自然によって人間の生は中断されるものと定められている」⁴⁸ので仕方がないが、その中断は「高度な文明のあらゆる資源と幸福に囲まれた社会人」⁴⁹の一人である彼にとって、少なからず残念なことなのである。だが、「休息は睡眠につながり、睡眠は夢を生む」⁵⁰という連続的な生の営みの中で、覚醒時に適切な食べ物を食べて内的印象を上手に刺激し、神経液を適切に補填すると、楽しい夢が現れて、睡眠は生の中断ではなく延長となる。穏やかな連続性において導かれる覚醒と睡眠の生の様態の変容は、人間と動物の切り替わりではなく、連続的な知的な生の異なる様態となる。

ここでもう一度、ピランの「コペンハーゲン論考」に戻りたい。ピランは、先述のように食餌によって精神を変容させる生理学的方法があると記述した後、次のように述べている。

もし将来、よく生き、よく振る舞い、よく考えるという偉大な術に関する優れた理論的で実践的な書が世に出れば、人の書き得る本のうちで最も有益なこの書は、紛れもなく生理学の精髓に、最も広い心理学的、精神学的な知識を統合させるような、生理学者による専門的な立場からの著作になるだろう。⁵¹

ブリヤ＝サヴァランが『味覚の生理学』を出版したのは、あたかも同書を予告するようなこのピランの記述から14年後のことである。瞑想21『食餌の休息、睡眠、夢に及ぼす影響』の「結果」の項には、まさに上記のピランの言葉通り、よく生き、よく振る舞い、よく考えるという偉大な術を実践するブリヤ＝サヴァランとおぼしき人間の姿が描かれている。彼は、仕事、休息、睡眠をめぐる環境を快適にして身体を健やかに保ち、社交を含む美食を楽しむ術を実践している。⁵² そうして導かれた睡眠は、以下の記述にあるように、生の延長となる夢を生み出してくれる。

すると愉快的な夢があらわれて、彼に神秘的な生を与える。彼は愛する人を見、お気に入りの活動にまた出会う、好きだった場所へ連れて行かれる。最後に徐々に眠りが薄れていくのを感じると、失われた時間を少しも惜しむことなく社会に立ち返る。なぜなら彼は睡眠中でありながら、疲労のない純粹無雑な活動を味わったからである。⁵³

過度な食事をした人は、神経液が縦横に交わり睡眠も覚醒も急である。従って「なかなか社会生活に戻れない」。⁵⁴ だが、美食を楽しむ術によって生じさせた夢は、上記のように、疲労のなき純粹無垢な活動を味わわせ、失われた時間を少しも惜しむことなく社会に立ち返ることを可能にする。つまり、生の延長となる夢は、人間の生命を穏やかなバイオリズムのうちに保ってくれるのである。

以上のように、内的印象と夢の関連性を繰り返し語るピランの思想と、食餌は夢を規定すると語るブリヤ＝サヴァランの思想は一致する。それは人間精神をよりよく導くための生理学的な解明に有益なのである。

このように、ガストロノミーの精神的側面である美食を楽しむ術は、覚醒と睡眠の両状態における人間の精神に多大な影響を及ぼすものとして、ブリヤ＝サヴァランの人間学、つまり「アントロポノミー」の一翼を担っていることがわかる。

6. 夢と快樂

ブリヤ＝サヴァランは、夢を生長の延長とみなし、美食を楽しむ術の行使によって意図的に夢を見ようとしていることがわかった。このこと自体きわめて斬新な発想といえるが、さらに独創的といえるのは、彼が夢を快樂と結びつけていることである。というのも、18世紀にヴォルテールが狂気と夢を類同視し、20世紀に至ってもフロイトが『夢解釈』で夢と精神病の関係を論じているとトニー・ジェームスが言うとおり、夢は長い間狂気と類同視され続けてきたからである。⁵⁵ 実際イデオログの流れをくむ思想家たちは皆、夢と精神不調を結びつけて議論を展開している。例えば『医学辞典』(*Dictionnaire des sciences médicales*)の「夢」(Rêve, 1820)の項を執筆したイデオログのモロー・ド・ラ・サルト (Moreau de la Sarthe, 1771-1826) はその中で、狂気は一般的に覚醒した人間の夢とみなされており、ゆえに睡眠時と覚醒時の知的諸能力の差異を検討する必要があると語って

いる。⁵⁶ だが、このような視点での夢の観察は、ブリヤ＝サヴァランにとってあまりにも豊穰性に欠けていたのだろう。彼にとって夢見る人間の精神は、狂気ではなく、人類を特徴づける知的諸能力の特殊な行使である。内的印象を上手に刺激することで生じさせた彼の夢には偉大な創造性が隠されている。彼が観察した3つの夢がその顕著な例である。一つ目は、重力の法則から解放される秘密を発見する夢、2つ目は、将来人々が苦痛の緩和に活かせるような途方もない快楽を感じる夢、3つ目は、時間の法則から解放されて未来の予測が可能になる夢を見ている。⁵⁷ このように彼は夢の中で、覚醒時には決して得られないような知性と快楽の拡張を味わい、啓蒙思想の継承者らしく、人類を進歩に導くヒントを得ている。そうした知的な夢は、彼に「もしこのような一ヶ月を過ごせるのなら、余生のすべてを喜んで捧げるだろう」⁵⁸と思わせるほど、とてつもない快楽をもたらすのである。

ところで、ブリヤ＝サヴァランは、人間のいわゆる性的感覚であるジェネジックを、人類が織りなすあらゆる文化、学問の創造の源とみなしている⁵⁹のだが、彼が夢を見させる食材としてあげたアスパラガス、セロリ、トリュフなどがジェネジックを誘発する食材であることにも注意を払いたい。彼は、食べ物で胃ばかりかジェネジックをも刺激することによって、知性と快楽を伴う夢を生み出そうとしているように思われる。こうしたブリヤ＝サヴァランの概念は、夢の深層に無意識的に抑圧された性的願望を見るフロイトの概念を想起させるものである。

夢が生理学的現象として探求されていた当時において、ブリヤ＝サヴァランは夢の内容に関心を示し、そのさらなる研究を「心理学者」⁶⁰に託している。無意識という概念がなかった当時において、彼は類似の概念を夢の現象に見出し、さらに夢の根源として性的欲望であるジェネジックをも意識している。これらの点において、ブリヤ＝サヴァランの夢の言説は極めて先進的であり、フロイトの先駆をなすといえるだろう。

7. おわりに

以上のように、『味覚の生理学』の休息、睡眠、夢に関する言説は、イデオログにとって重要な、無意識的かつ継続的に働き続ける内的印象の議論を反映したものであったといえる。ブリヤ＝サヴァランは、医学革命期に知識層で共有されていた医学哲学の思想を、大衆が理解できるようにあえて世俗化したものと考えられる。

身体的現象である睡眠が生み出す、精神的現象である夢、その生産にガストロノミーは深く関わっている。活動、休息、睡眠、夢という漸進的な生の変容において、人間は徐々に意志を失い、睡眠状態にあっては無意志となる。それは極めて身体的あるいは動物的な状態であるのだが、覚醒時に美食を楽しむ術を実践すると、静かなる睡眠が誘引され、知性溢れる創造的な夢を生み出すことができる。それは文明社会に生きる知的な生命体である人間を、緩やかな生命の連続性の中に保ってくれるだけでなく、人類にふさわしい快楽と人類を進歩に導くヒントを与えてくれる。そして、その夢の観察は、無意識に近い概念と結びつくことによって、人間の精神の深みへの更なる探求に貢献しうるのである。

人間の精神の根源を感覚のみならず、身体組織の深みにまで求めるカバニスの人間学は、当時のみならず後世にも多大なる影響を与えた。だがそこで探求された人間の精神は、結局のところ「ある特殊な視点のもと考察される身体」⁶¹でしかなかった。一方、ピランは、心理学と生理学が交わるような人間学を模索している。ブリヤ＝サヴァランはその人間学をガストロノミーと結びつけることによって、人間の精神と身体がより高次の世界で結びつく「アントロポノミー」を生み出したのだと考えられる。なぜ高次であるかということ、ブリヤ＝サヴァランは美食行為を人類の属性である精神でなされるものとみなし、その学問であるガストロノミーを、あらゆる学問、文明、階層に通ずる高次の学問とみなしていたからである。⁶² この意味において「アントロポノミー」は、現代的な意味での<anthropologie>に近い概念であることに注意を払いたい。つまり、ブリヤ＝サヴァランの「アントロポノミー」は、社会学、文化学、民俗学などを広く包摂する、現代的な人類学の予告とみなしうるだろう。

人間と身体の関係性を単に生理学的に捉えるカバニスの人間学は、生理学と心理学の合流点を求めるピランの思想を経て、ブリヤ＝サヴァランの手に渡り、ガストロノミーと結びつくことで、はじめて深遠なる広がりを持つものとなったのである。

註

* フランス語の翻訳はすべて拙訳だが、ブリヤ＝サヴァランとビランのテキストに関しては既訳を参考にした。

1. Jean-Anthelme Brillat-Savarin, *Physiologie du goût, ou Méditation de gastronomie transcendante : Dédié aux gastronomes parisiens par un professeur*, Paris, Flammarion, 1982 (1825, 以下PhG.と略記する。)[ブリヤ＝サヴァラン 『美味礼賛』 関根秀雄・戸部松美訳、岩波書店、(上) 2016年、(下) 2015年]
2. *Ibid.*, p.207 [同書(下)、22頁]
3. カントが1797年の『人倫形而上学』の「徳論」で用いた「アントロポノミー」は「人間規範学」と訳され、理性の自律性に与した人間学で、ブリヤ＝サヴァランの「アントロポノミー」とは異なる。ただしイデオログたちはカントの思想を注視していたため、この語の学問的な響きにヒントを得た可能性はあるだろう。
4. *Le Dictionnaire historique de la langue française, s. l. d. d'Alain Rey*, Paris, Dictionnaire le Robert, 1992, p.85
5. ブリヤ＝サヴァランへのカバニスを代表とするイデオログの影響については、フランソワ・ピカヴェ (François Picavet, *Les idéologues*, Félix Alcan, 1891)、近年ではパスカル・オリイ (Pascal Ory, «*Brillat-Savarin, dans l'histoire culturelle de son temps*», in, *Gastronomie et identité culturelle française: Discours et représentations (XIX^e-XXI^e siècles)*, Nouveau Monde édition, 2009) 橋本周子 (『美食家誕生・グリモと<食>のフランス革命』、名古屋大学出版会、2014年) らによって指摘されているが、その本格的な研究は存在しない。
6. *Œuvres complète de Cabanis, Tome troisième, Rapports du physique et du moral de l'homme*, Paris, Bossange Frère, Firmin Didot Père et Fils, 1823-25, p.40
7. Maine de Biran, *Rapports et du physique et du moral de l'homme*, p.144 [メーヌ・ド・ビラン、『人間の身体と精神の関係—コペンハーゲン論考1811年—』 掛下栄一郎監訳、早稲田大学出版、1997年、227-228頁]
8. PhG., pp.36-39 [ブリヤ＝サヴァラン、前掲書(上)、43-46頁]
9. *Ibid.*, pp.27-31 [同上、33-38頁]
10. Erwin Heinz Ackerknecht, *Medicine at the Paris Hospital*, Baltimore, The Johns Hopkins Press, 1967, [アーウィン・H・アッカーケネヒト、『パリ、病院医学の誕生、革命暦第三年から二月革命へ』、館野之男訳、みすず書房、2012年、9-10頁]
11. *Ibid.* [同上、34-47頁]
12. Thierry Boissel, *Brillat-Savarin un chevalier candide*, Paris, Presses de la Renaissance, 1989, pp.162-163
13. Antoine Louis Claude, comte Destutt de Tracy, *Éléments d'idéologie. Première partie. Idéologie proprement dite. Par A.-L.-Destutt-Tracy, 2e édition*, Paris, Courcier, 1804, p. XIII
14. Cabanis, *op.cit.*, p.46
15. 例えば、フィリップ・ピネル (Philippe Pinel)、モロー・ド・ラ・サルト、リシュランなど。
16. PhG., p.34 [ブリヤ＝サヴァラン、前掲書(上)、40頁]
17. *Ibid.*, p.23 [同上、28頁]
18. Cabanis, *op.cit.*, pp.456-457
19. PhG., p.189 [ブリヤ＝サヴァラン、前掲書(上)、264頁]
20. *Ibid.* [同上、265頁]
21. Tony James, *Dream, Creativity, and Madness in Nineteenth-Century France*, Oxford University Press, Oxford, 1995, pp.27-28
22. Biran, *op.cit.*, p.139 [ビラン、前掲書、145頁]
23. *Ibid.* [同上、146頁]
24. PhG., p.194 [ブリヤ＝サヴァラン、前掲書(上)、271-272頁]
25. *Ibid.*, p.197 [ブリヤ＝サヴァラン、前掲書(下)、12頁]
26. *Ibid.*, p.193 [ブリヤ＝サヴァラン、前掲書(上)、269頁]
27. Biran, *op.cit.*, p.124 [ビラン、前掲書、131頁]
28. *Ibid.*, pp.124-125 [同上]
29. *Ibid.*, p.149 [同上、162頁]
30. PhG., p.211 [ブリヤ＝サヴァラン、前掲書(下)、29頁]
31. *Ibid.*, pp.211-212 [同上、30頁]
32. *Ibid.*, p.211 [同上、29頁]
33. *Ibid.* [同上]
34. *Ibid.*, pp.196-203 [ブリヤ＝サヴァラン、前掲書(下)、11-17頁]
35. *Ibid.*, p.201 [同上、14頁]

36. *Ibid.*, p.203 [同上、16頁]
37. *Ibid.*, [同上]
38. *Ibid.*, p.201 [ブリヤ=サヴァラン、前掲書(下)、14頁]
39. *Ibid.*, [同上]
40. *Ibid.*, [同上]
41. *Ibid.*, [同上]
42. *Ibid.*, p.212 [同上、31頁]
43. *Ibid.*, pp.212-213 [同上]
44. *Ibid.*, p.213 [同上]
45. *Ibid.*, [同上、31-32頁]
46. *Ibid.*, [同上、32頁]
47. *Ibid.*, p.196 [ブリヤ=サヴァラン、前掲書(下)、11頁]
48. *Ibid.*, p.192 [ブリヤ=サヴァラン、前掲書(上)、269頁]
49. *Ibid.*, p.195 [同上、272頁]
50. *Ibid.*, p.192 [同上、269頁]
51. Biran, *op.cit.*, pp.149-150 [ビラン、前掲書、162頁]
52. Ph.G., pp.213-214 [ブリヤ=サヴァラン、前掲書(下)、32-33頁]
53. *Ibid.*, pp.214-215 [同上、33-34頁]
54. *Ibid.*, p.213 [同上、31頁]
55. Tony James, *op.cit.*, p.2
56. *Dictionnaire des sciences médicales, tome quarante-huit*, Paris, Panckoucke, 1820, pp.245-300
57. Ph.G., pp.207-210 [ブリヤ=サヴァラン、前掲書(下)、22-27頁]
58. *Ibid.*, p.210 [同上、27頁]
59. 浦上祐子、『ブリヤ=サヴァラン『味覚の生理学』における「味覚」—<génésique>という概念をめぐって— お茶の水女子大学人間文化創成科学論叢 第20巻(2017) 39-47頁を参照のこと。
60. Ph.G., p.202 [ブリヤ=サヴァラン、前掲書(下)、16頁]
61. Cabanis, *op.cit.*, p.67
62. Ph.G., pp.62-63 [ブリヤ=サヴァラン、前掲書(上)、83-84頁]

